

正宗白鳥

文学の行衛



# 文学の行衛

— 「暗夜行路」を頂点として —



「暗夜行路」では、私は、赤児が生れると早速丹毒に罹り、治療に手を尽したのに関わらず、病後一と月で到頭死んで了った経路を叙したところ、「赤児は苦しみに生れて来たようなものであった」ことの光景に、最も心を惹かれた。赤んぼでも生きようとする強い意志は持っているので、重い病に悩んで泣きつづけていながら、生きんとする力をまざまざと現わしていたが、それも長くは続かず、抵抗力もついに打挫かれるのであった。赤ん坊の病気なんか、私などには興味のない筈の小説材料なの

だが、作者の描写の筆の冴えているため、材料の取扱い態度が正鵠を得ているために、私などにも感銘が深かったのか。

こういうところを読んで、子供を育てるのは容易な事ではあるまいと、その経験のない私も空想した。自分で経験しない事は、空想の世界である。いかによく書かれた小説を読んでも、それから受ける感じは空想裡の感じであって実感ではない。作家がいろいろな世相人事を書いても、自分が体験しない事は、要するに空想の所産であって、空想の所産と、体験に基く産物とでは、読者の

受ける感じは異なるべきである。

それで、赤ん坊を持つと云う、有ふれた平凡な経験さえ持っていない私は、「暗夜行路」所載の、傑れた描写に接しても、空想裡でその生物苦悶の光景を鑑賞し「苦しみに生れて来た」人生を芸術として玩味するのである。現実と芸術との類似、現実と芸術との相違が、こういう作品の一つ一つを読む時分に考えられる。

「暗夜行路」をはじめて読んだ時、主人公の遊蕩的行動などがあれこれと書かれているのに何の興味もなく、退

屈に思った。若い男の遊蕩振りなら、もつと面白可笑しく書かれた作品が幾つもあるので、この程度のもものは、むしろ凡庸であり、遊蕩記事の取扱い振りに新味はないと思つた。遊蕩描写こそ、日本文学に於ても多種多様で、徳川期戯作物の系統を曳いた紅葉鏡花などの硯友社の作風、緑雨の作風、荷風の作風、いずれも通俗的日本好みの遊蕩振りの描写で、一般の小説読者に喜ばれるのであつた。それから、自然主義作家の遊蕩小説は、粉飾の乏しい、色も艶もあらい落したところに、真実味があると思はれてはいたが、これでは読者の遊蕩気分をそそる所が



ないので、一般の小説読者には好まれなかったらしい。ところで、志賀直哉など、新興の白樺派の作家なら、その作中の遊蕩記事に、在来の小説家の遊蕩扱い振りとちがった新味がありそうに想像されたが、さしたる新味なく、代り栄えもしないのであった。ちよいちよい理窟が出て来ても、それは読者の心を惹くほどの理窟ではなかった。人間の行動についての「白樺」流の理窟も大したものではない。

読みながら私は退屈を感じた。主人公が旅先で「お前は母上と祖父上との間に出来た子供なのだ」と、兄の手

紙で知らされたことによつて、読者たる私も、はじめてこの小説の特異性に興味を感じ、振返つて、この小説の書きはじめからの作者の製作技巧にも思い及んだのであった。藤村の「新生」に於て、十何回目かで、伯父と姪との関係という異様な事件が不意に示されて、読者の興味が刺戟され、それから作品に喰入つて読まれるようになったのと似ている。しかし、似ているとは云え、「新生」が、作者いのち懸けの事件発表とは大に異り、「暗夜行路」の方は、小説として、主題が珍らしいと云う程度で、読者の好奇心を惹くだけである。

それで、私は、昔「暗夜行路」の前篇が出版された時に、「週刊朝日」誌上に、その読後感を発表して、（どんな批評を下したか忘れていますが、ただ読んで退屈を覚えたと云った事だけは記憶している。それから、小島政二郎氏が、「退屈どころではない。読みながらページの減るのが惜しいくらいだ」と、何処かで云っていたのを記憶している。前篇出版の時は左程でもなかったようだが、この小説は歳月を経るにつれて重味を加え、近代日本の小説道は、この作品によって最高頂に達した如く見られるようになった。

改造社が円本を出した時には、その第一回配本に、夏目漱石集を出したのではなかったかと、私は記憶しているが、それはどちらにしても、あの時代には、文壇の有望も、書物の売行も、漱石第一であった。尾崎紅葉が二回目の配本であったらしく、明治中期の最大の人気作者であった彼は、改造社円本時代には、まだ世間的名声は失っていないのであった。ところが、河出書房の「現代日本小説大系」では、「暗夜行路」が第一回配本となっていて、漱石集は第二回目に発行されている。この小説大系は、改造社の円本とは編輯態度もちがっているが、編

編輯者は、当代の優秀なる批評家鑑賞家の一群によって成  
立しているので、その作家作品の選抜は、最も信賴すべ  
きである。それ等傑れたる編輯者が一致して、「暗夜行  
路」を大系本の最初の発刊として推薦したとすると、そ  
れによつても、この作品が明治以来の小説中、最高の地  
位を占めていることが証明されるのである。とに角、明  
治以後の小説は、此処に於て、一先ず最高頂に達したの  
で、新たに小説文学は、これから、ちがった道を経るか、  
或は同じ道を進めて新たに開展されるのであろうか。

私は手あたり次第、何でも読むのが少青年の頃からの

習慣になつていて、同じ書物を幾度も読んでゐる。日本の小説でも、三度五度、或は十度も繰返して読んでゐる者がある。感心して愛読するのじやなくつて詰らない者である、読むたびに思いながら読んだ者も、極めて多い。紅葉の、いや味な、低調な、浅薄な作品を、年甲斐もなく今でも読むことがある。今日も、偶然「小説大系本」によつて久振りに紅葉の「心の闇」を読んだ。そして、盲人の恋についての作り話に、座興程度の興味を覚えた。近松門左衛門の何百年記念にちなみ、何か書けと、或雑誌に頼まれたので、久振りに、彼の浄瑠璃の何種類

かを何度目かで読み、これが日本文学の精粹であるかと頭をひねった。近松は虚実の間を狙ったと云われているが、そこに芸術がある訳で、近松的美学の現われである。しかし、作家が一すじに現実描写をねらっても、それが嘘っぱちである事が多く、嘘すなわち空想を恣のままにしても、おのずからそこに現実の真味が涌出る事もあるのである。どんな奔放な空想にしても、現実が基礎となつて、そこから発散するのである。それで、虚と実の間をねらい、虚実をうまく操ろうとするのも、作家の小細工であつて、虚実のどちらか一本で進んで行って、作者自

身の持味で行くべき所へ達してもいいのである。小説は嘘を書くものなり、小説は真を書くものなりと、定義しても、詰りはどちらも同じようなものだ。

私は「暗夜行路」を読むのも、今度で三度目だ。近年著しく記憶が衰えて、昔何度も読んだ書物に何か書いてあったかを大抵は忘れていたので、「暗夜行路」も今度はじめて読んだような感じがした。そして今度は可成り面白く読んだ。この作家は小説家としての目を具えている人で、描く事は鮮明である。京都、尾道、大山などの風物が目に見る如く描かれている。絵のようだと云って



いいのか。詩のようだと云うよりも絵のようだと云っていい。描写も筋の運びもだれたところがなくって、引締った趣きのあるのは、この作者の特色であり、文章の達人として見られる所以であるが、私は、時任謙作という主人公には、終始を通じてさして心を惹かれなかった。精神修業に田舎の禅寺へ行くと云う一卷の結末の所は、私などには多少共鳴されそうであり、「人間が鳥のように飛び、魚のように水中を行く」という事は、果して自然の意志であろうか。こういう無制限な人間の欲望がやがて何かの意味で人間を不幸に導くのではなからうか。人

智におもいあがっている人間は、何時かそのため酷い罰を被る事があるのではなからうかと思つた」と云つたよ  
うな種類の感想には同感すべきであるが、一卷を通じて  
のこの人の言論行動に親しみも感ぜられなければ、人間  
としての妙味も感ぜられなかつた。個性を具えた一青年  
として、その個性が引締つた会話や文章を通じて、よく  
表現されているらしいが、彼の面目が私にはよく映つて  
来なかつた。作品に味わいの出て来るのは読者次第なの  
で、私の持つて生れた人間性や趣味好尚、日常の体験は、  
時任謙作の心に入つて行けないのであろうか。読みなが

ら上の空になるのである。お栄直子のような女性だって、特別によく書けているとは思えない。私などの読者を惹きつけるような魅力を、それ等女性は有っていない。

「暗夜行路」を、近代日本文学の最高峰とすると、日本の文学は小さく堅まっているものに過ぎない感じがする。私など、長い生涯の間に、西洋の文学も、翻訳や解説、評論などを通じて、広範囲に渡って知っている筈であるが、それも知ったつもり、一知半解以下であるから、遠慮するとして、日本近代の小説に、個性が潑刺として、作品の上に浮上っているのはあまり見られない。

私は、二葉亭四迷には、たった一度会ったきりであるが、その折の雑談のうちに、四迷は、トルストイは気六ケしい爺さん、ドストエフスキーは人のいい爺さん、ツルゲーネフは甘い人間であると云ったように、いろいろなロシアの作家を手軽に批判していた。無論一時の座興見たいなもので、真面目な人物評論ではなかつたのだが、当時の二葉亭は、ロシアの武人や政治家の方に、人間的関心を寄せ、重きを置き、文学者を軽視していたらしかつた。(それでいいではないか) 一回の会見で、私は二葉亭からそういう印象を受けた。彼は憂国の志士と云つた

ような心構えがあつて、小説などは心の遊戯としていたのにちがいない。

ところで、そういう心構えの二葉亭の翻訳によつて、私などは、個性潑刺として作品の上に浮上つているルージンのような人間に接触したのであつた。ルージンその他二葉亭の翻訳したロシア小説には、若い男性若い女性が生々と現われているように、我々には感ぜられたが、それ等の男性女性が現実のロシアに存在しているかどうかは、私などには分らない。存在していいようといまいと、そう思つて読んで、わが空想裡の感激を享樂したのであ

った。此処で私は、ルージンやバザロフなど異国の小説中の人物を問題としようとするのではなく、二葉亭の「浮雲」を回顧するにつけて、彼の文学観や文学行動を思い出したのである。「浮雲」や「当世書生氣質」が出版されて、明治の新日本に文学の新気運も動きかけた時には、私はあまりに年少で、それ等の新書に接触することはなかった。紅葉露伴以後の作品はそれ等が発表された時々、に乱読したのであったが、「浮雲」を読んだのは、博文館の代表的雑誌「太陽」が何かの記念として、明治初期中期の小説を蒐集して、臨時増刊として出した時であつ

た。それまでにも「浮雲」は、新文学の魁さきがけとしての名前には知られていたが、文壇でもあまり読まれていないで、影が薄かった。私自身はじめてそれを読んだ時には、文章のふる臭いことは別としても、作中の人物に親しみは寄せられなかった。二葉亭訳の「うき草」のルージンはぴったり我々の心に馴染まれたが、「浮雲」中の人物は却って我々に縁の無い人間見たいであった。

それなのに、この頃になって、不思議にも、この「浮雲」が、新時代の批評家によって、物々しく検討されて、重々しく新たに評価されるようになった。私も、今度、

何度目かで、少し読んで見た。新時代の日本文学に出現した最初の代表的人物内海文三が、煮え切らない、愚図の、意気地無しであることは、今更云うほどの事でもないが、不思議なようであった。明治時代のあの頃を背景として、こういう人物が作品の上に浮び上るのは不思議なようである。あの頃の日本国民も自己反省したら、内海の如く、不安焦噪に駆られるようになっていたのであるか。

この男がああの頃の時代の代表的人物であるか何うかは別として、私などでも理解し共鳴し得られる個性を具え



た人物が文学作品の上に出現したのが面白いのであろうか。それから、二葉亭以来「浮雲」以来、時代々々相応に個性を具えた人物が現代日本文学の上に出現している事は認めなければならぬのである。画家の人物画に出現している如く、彫刻家の人間像に出現している如く、文学の形で、優秀な幾人かの人物画人間像が作り出されている。しかも、文学では、絵画彫刻とちがって、一個の人間の変転推移が現わされるところに、絵画彫刻にまさった妙味がある訳だ。どんな小説にだって、何等かの人間の身体のさま心のさまは現わされているのだが、

時代々々を通じて、どういう作中人物が際立った存在を示しているか。亀井勝一郎氏は、「現代文学にあらわれた智識人の肖像」として、二葉亭の「浮雲」の主人公内海文三をはじめ、明治大正昭和の三代に渡って、十人ほどの作家の作品の主人公を取挙げて論評している。小説中の代表的人物を検討すれば、おのずから時代相がよく分るものらしい。現実の政治家や学者や軍人などよりも、作家空想裡の人物の方が却って一層濃厚に生きていくらしく印象されるのである。間貫一は現存していたらしく、漱石の「坊っちゃん」も現存していたらしく読者に思わ

れるのである。藤村の「新生」の主人公は小説的変名を用いていても、作家自身であり、その作品に書かれてい  
る事は、作家自身の経験をそのままに打ちま<sup>ぶ</sup>けたものと、  
はじめから読者に思われている。作品鑑賞がそういう風  
になったのも、日本の現代文学に厚味の加わったこと  
なるのだが、内海文三が二葉亭の空想の産物であり、間  
貫一が紅葉の空想の産物であり、「坊っちゃん」も漱石  
の空想の産物であり、「新生」にしても、芸術品として  
突留めて行くと、つまりそれも作者空想の産物だと云う  
事にもなるのである。作者が一しよ懸命に自分の経験を

書いているつもりでも、自分の自分とはちがひ、知らず知らず芸術化された自分が出ているのじやないかとも思われる。それから作者空想のさまざまな産物をも、読者は、濃厚に現実に生きているものとして感銘することがよくあるのである。

亀井氏の挙げているのを例としても想像されるが、二葉亭以後の諸作家の描いている人間像のうち我々読者として誰に最も興味を感ずるか。魅力を感じるか。その人間の精神肉体の明暗如何に関わらず、我々を感激させる男女が、多くの作品の中のどこに存在しているか。私な

どは二葉亭鷗外、その他誰彼の翻訳小説に於てそれを見て感激するほどに、日本の作家のものには、心酔も感激もさされなかつたように記憶している。女性なんか殊にそうだ。現実には我々を魅惑する女性が無数に存在するのである。創作の女性にはそれが甚だ乏しいようである。歌舞伎の舞台では、たまには観客をしてほればれする思いをさせる女性が、女形によつて出現することもあるが、小説の上では、それがあまり見られないのである。「金色夜叉」のお宮なんか、紅葉の描いたところでは何の魅力もない凡庸な女である。こういう女に棄てら

れたら、高利貸の手代に身を落すのも無理はないと読者に得心させるような魅力を、作中のお宮は持っていないのである。それに悔悟したというお宮の、貫一におくる手紙のまずさ。相手の心をとろかす、涙も艶も皆無で、事務的の手紙のようである。事務的なならまだ忍ぶべきが、江戸の遊女でも云いそうな、いや味な口調がまじっていたりして、こんなものを読んだら、一層彼女に対して嫌悪の念がましそうである。現代日本の小説のなかに、ラブレターと云った種類のもので、心蕩ろかさされる思いをさせるものがあるだろうか。私には思い出せない。

鏡花や荷風の作品には、旧めかしいながらも、読んで惚れ惚れする女性があるかも知れないが、それも私には思出せない。

外形の描写で女性美を現わすとなると、文学は絵画には及ばない。しかし、心理描写、心情の発露などによって、その人となり知られることによつて、読者はその女性に懐っこくなる事もあり得るのである。「源氏」には、そういう女性が幾人かあるようである。近松の浄瑠璃には、読んだだけで、そこに漂っている女性美に魅惑されるものが幾つか無い事はない。たとえば梅川などは

その一例である。

外形美ばかりではない。新しい時代の女性としての精神風豊を具えた女性は、在来の小説の上にはまだ活躍していなかった。嘘にしろまことにしろ、芸術を通じて、豊かに人間の姿を示し了せることは極めて困難なのであろうか。二葉亭は、あの時代の一人の人間を、小説の形の上に文字を取って描出そうとして、力及ばずして途中で投出した。その後の秀才は、二葉亭のように自己の小説才能に関する自己反省の悩みを悩まないで、それぞれに努力して小説を書き続けて、文壇を賑し、浩瀚な文学史



がおのずから出来上った訳だ。私などは少くも明治以来の文学史には通曉して、その歴史に記録を留めるほどの作品は大略一読しているのみならず、物によつては三読五読十読しているほどであつて、私がそれから受けた感化は容易ならぬものであつたと推測される。私自身、創作に當つて、意識して誰の真似もせず誰の感化も受けていないつもりであつても、知らず知らずいろいろな作品いろいろな作家の影響を受けていたにちがいない。時代を超越した孤往独進を続けることはあり得ないのである。それで、時代から飛離れたものは書けもしなかつた

であろうし、時代に見棄てられるようなものを平然と書く気にもなれなかつたであろう。（甚だしく老境に入り込んだ今日こそ、何を書いたっていいように思われているが、それだつて流行を全然無視することは出来ないだろう）

芸術至上主義ではない私は、小説を読みながらも、人生の行衛を知ろうとか探ろうとか云う気持は絶えず持っていた。無意識のうちにも、文学の行衛を人生の行衛として見詰めていたのである。暗々裡に捜していたとして、文学者などは、嘘にでも、壮大な人世の行衛をも、

けんらんな人世の行衛をも、私に見せてくれなかった。嘘にでもまことにでも、我々をして讚美感歎して仰見させるような男性をも、恍惚と蕩けさせるような女性をも見せてくれなかった。詰り、文学にはそれだけの力はないのか。「金色夜叉」の貫一や宮が、浅はかなと云ったが、それ等を浅はかとして斥けていた自然主義作家の作品も、浅はかでないこともない。世相人情を知ること、日常の生ける苦しみ、生ける喜びを知ること、それぞれに小説的面白さはあるにはあるが、それっきりかと、今日の私には思われるばかりである。藤村の「家」などは、

在来の日本の家族制度に附纏った悩みを叙したものとして無類であり、文学的傑作としての折紙をつけてもいいのであるが、こういう作物にしても、それだけかと、今の私には物足りなさが感ぜられる。

明治以来の文壇批評家の云う程度の理想主義小説の詰らなさは尚更である。自我の克服と云ったような事が、いつの頃からか批評家慣例の用語になり、夏目漱石の小説中の或人物は、自我の克服を目差していると、批評家は看破し、そこに峻巖な倫理性があり、その作品の文学価値もそこに存在していると説いたりしているが、自我

を克服するかしないかで、作品は文学的価値判断が下されるのか。西洋の批評家はそう云う風に見ているのか。私などは、芸術至上主義者ではないが、芸術は芸術として求むるところがあり、自我の克服のような、倫理的道徳修業なんかどうでもいいと思っっている。自我を握って生れた我々である。自我を思う存分のさばらせたらいいじゃないかとも思っっている。私などは自我の小なる人間であって、従って自分の書いたものは甚だしくいじけていると思っっている。それで自我の克服どころではない。嘘にでも自我をのさばらせて、我心の行衛を見ようと志

すようになっても、その小なる自我は膨まされず、膨ましたつもりで見ても、内容は甚だ稀薄であることを免れなかった。(漱石の作品にしても小廉曲謹の士作品と云った感じがする)

作家の自我克服態度を観察して、それを讃美する批評家もあるが、「悪の讃美」と云ったような書振りに、新しい芸術味があると、批評家が勿体振った筆鋒で好意的批評を下した時代もあった。ボードレール一味のフランスのデカダン詩人が引合いに出されていたこともあった。私にはそういうフランスの詩は分らず、仮りに分つ

ても面白くはなさそうであつたが、そう云う悪の讚美なら、日本に珍らしくないではないかと、私は今も思つてゐる。默阿弥の脚本を読んでも、講談を読んでも、悪人がのさばつて、作者も読者も、話し手も聴き手も、それを讚美していることは、明らかに推察されるではないか。勸善懲悪の仮面の下に、悪が讚美されているのである。強盜殺人、ゆすり、かたりが、きびきびと威勢よく活躍して、見物を面白がらせているのだ。こういう風に自我を發揮して悔ゆるなき態度と、純文学で、あくせくと自我を克服せんとする態度とを比較して見ると、そこに一

種の文学批評的見解が起つて来そうである。

黙阿弥など古めかしい脚本作家を思出したのを縁として、私は、歌舞伎劇について考慮し、それによって昔からの文学の推移、文学の行衛を考えた。西洋伝来の文学批判から離れて、文学の正体を見る気にもなった。文学とか芸術とかいう言葉は、明治以後の翻訳語であって、これによって過去の日本の文学や演劇を批評するのは、旧物に新味を見つけると云う意味で甚だ面白いのだが、一面滑稽な感じもするのである。黙阿弥などの製作した歌舞伎狂言なんて云う者は、江戸末期の人世の頽廢期の



遊戯見たいなものなのだ。あの頃、文化としても無知であり、趣味としても低調であつた江戸の所謂通人連中は、三題噺だの、絵合せだの、遊食会だの、悪摺りだのを楽しんで、一種の芸術生活としていたので、歌舞伎なんかは、そう云う遊びを結晶させたようなものだった。或人世の末期的時代に夢だかうつつだか分らぬようなものを捏<sup>で</sup>ち上げて民衆を魅惑したのであつた。淫猥であり残酷であり醜悪であつた。小団次と黙阿弥との活躍していた時代に、徳川政府の取締り役人が、「近年世話狂言人情を穿ち過ぎ、風俗に拘わる事なれば、以来は万事濃くなく

色気なども薄く」するようにと、芝居関係者に言渡したので、小団次は失望して、それでは充分に自分の芸が見せられなくなると、それを苦にして死を早めたと云われているが、取締り役人の処置も、今日の目で見て、芸術無理解とは云われなれないと思われる。

その歌舞伎も、明治以来次第に浄化されたのであるが、それにつれて、歌舞伎の妙味も失われたのにちがいない。坪内逍遙は、「歌舞伎も干物のようになった」と云ったりしていたが、しかし、新しい味も加ったのではないかと、私には思われている。この歌舞伎の味わいは、日本

人には今なお魅力になっっているらしく、新劇なんかよりも歌舞伎の方が栄えているらしい。映画にでも昔の歌舞伎の味わいがひそかに伝っていて、それが見物に魅力を持っっているらしい。小説についても同様である。終戦後の経路を見ていると、歌舞伎に含まれていた味わいは、小説にも伝っている。そういうものが大衆の喜ぶところとなっっている。知識人にも喜ばれている。明治以来、具體的に云うと、「浮雲」以来、歌舞伎趣味江戸趣味武士道趣味から外れて進んで来た文学も、昔に戻るんじゃないかと思われなくてもない。そう云う事があるものか、

西洋も二十世紀物、二十世紀も最近の西洋文学に、新時代の文学はかぶれるようになっていゝ有様で、もはや昔のものが威力を揮う事はあるまいと思われそうだが、案外そうでないかも知れない。

そうして、私は文学の行衛はどうなるかと思う。芸術至上主義者でない私には、究極のところ文学はどうでもいいとしても、文学の推移に自分の心の推移を託して見るのである。仮りに、自分は衣食住に満ち足りていて、周囲の人間の生存振り、日常の生き方を傍観して見るとして、そういう人の目には、文学はどう映るか、何かの

現実の事情で、日常の生活に悩んでいるとして、そういう人の目には、文学はどう映るか。それが悦楽の具となるか、救済の具となるか。私は文学作品の上に自己の影を見ることも多く、また自己の空想の資料とすることも多いのだが、それは私の生存に最も必要なものだろうか。取りかえ引きかえ、古今の無数の文学の上に自己の影を見、自己の空想の資料としたことを思うと、もう沢山だと云った感じがしないこともない。

私は、さき頃、チャプリンの「殺人狂時代」と云う舶来映画を観た。「黄金狂時代」と呼応して付けられた翻

訳語の題目であるが、原名は、主人公の名だけで、それに、殺人の喜劇と傍注を入れているだけらしい。「殺人狂時代」などと、日本人好みの大上段に翳した題名は、チャプリン物には似合わしくないのである。近代映画をあまり観たことのない私には、この映画は甚だ面白かった。先日或会合の席で、映画に通じているらしい人々が、このチャプリン映画を出来そこないの者とし、後味の悪い者として批評しているのを、私は傍聴したが、私にはいろいろな意味で面白かった。十数年前に彼の「黄金狂時代」によって、はじめて映画の面白味を知った私は、

その後幾つかのチャプリン物を観たのであったが、この喜劇役者がここに到達したことに興味を覚えたのだ。彼らしい喜劇味が随所におのずから流れ出ている上に、凄いい人間味とともに、やさしい人間味も出ていて、最後に棄て鉢的悟道の境地をほのめかすようになったのに心惹かれた。戦争を嘲ける気持、神に対しても敬虔の念を失っている態度。それを私は、取ってつけたようなものとは思わなかった。映画でも小説でも、読んだあと、観たあとでは、理窟はどうにでも附くものだが、観ているうち、読んでいるうちに、直ちに感じたのが当人に取って

は最も意義があるのである。映画なんかは、いかにして多数の見物を喜ばせようかと工夫の限りを尽している芸術で、作者が読者をも見物をも眼中に置かないで、おのれの欲するままを表現した芸術とはちがうのである。でも、チャプリンの映画などは映画を通じて自己を發揮しているように、私には思われるのである。

チャプリンの技巧は技巧として、その人生感想人生批判は、案外手薄であり安価であると、我々は批評家気取りでひねって考えると、云えそうである。しかし、戦後に現われた日本の小説だって、その人生批判振りが手厚



でもなく高価でもないようにも思われる。

私は、川端康成の「名人」物を愛読した。勝負師である本因坊名人は、勝負事と自分とを一しよにして、それとともに生きそれとともに死んだのであると、読者に思わせるように、作者川端は書きこなしている。勝負事そのものにどれほどの人生価値があるうとも、その勝負事に殉じて、それに甘んじている心境は、救われる人生と云った感じがする。チャプリンのかの映画にも、あの人物は死刑になっても、そこに救われたる人生を感じささされている。宗教に救いがあるか。文学芸術にも救いがあ

るか。私は、これだけ文学作品を読み続けて来たのだから、文学に救いがあるものなら、何かの救いを得ていそ  
うなものだが、それはまだなさそうである。

私は、歌舞伎を観て、なぜこんなことを面白がるかと、  
我と我身に不思議に思うことがあったが、小説でもなぜ  
こんなものが面白いかと疑いながら、読んで来たのであ  
る。音楽愛好者がいい音楽として聞惚れるものが、音楽  
的素質も教養もない人間にはちつとも面白くない如く、  
独得の作者にちがいない泉鏡花の作品が私には面白くな  
く、それを読むことによつて恍惚境に入り得なかつた。

幸田露伴の作品も、私にはその晩年のは多少読み応えがするのであったが、紅葉と比ならんで新進作家としての華かな生存を示していた頃のは殆んど面白くなかった。その作品に示されている理想は私の心に感銘されなかった。紅葉は技巧だけ、露伴には理想があると、早くから云われていたが、露伴の理想なんか、何ほどの事かあらんと、私は早くから思っていたが、今回顧すると、なお更そう思われる。全体、私などが学んだ日本近代の小説中の理想、社会批判などは、何ほどの事かあらんと、私はいつも思っている。チャプリンの、今回の映画に潜在

し、或は露出している程度の理想、社会批判でも、チャプリンはチャプリンらしく要を得ていると云つていい。鷗外漱石藤村などのような勿体振った人々の理想、社会批判だって、有ふれた凡庸のものではなかったか。荷風の社会批判だってさしたる事ではなかった。むしろ、終戦後にこそ人生の理想も、社会批判も、いきいきと出て来たのではなかったか。文壇人でも、一時目が醒めて世界を見直すようになったのではなかったか。鷗外漱石藤村などのような、聡明人や、根気強い人生の探究者にも見出せなかった人生の真相が、敗戦後は、通り一ぺんの

凡庸な文壇人にも見えるようになったのである。それ故、私は戦後の文学の行衛を見極めたい気持になるのである。芸術の出来は別として、敗戦後の文学は、在来のに比べて次第に変わって行くにちがいないと期待したのであった。戦後派は文学に於ても、他の何事に於ても、お疎末であると云われていたが、戦後派に於てこそ、今までとはちがった新（或は真）人生が開展されることと私は期待したのであった。新しい文学史はこれよりはじまると思っていた。

敗戦を知らない過去の作家はお目出たい作家であり、

人間の本質を知らない作家であると、私は思っていた。荷風でも潤一郎でも、いかに傑出していても過去の作家であり、志賀の「暗夜行路」や、或は横光の「旅愁」などが、二葉亭以来、自然主義派やロマン派や人道主義派や新感覚派などのさまざまな作品創造によって進歩発展した過去の文学の最頂点を示しているにしろ、既に過去の作品であると云えば云えそうである。私は、名作「旅愁」については、辛うじて一読した時、そこに示されている東洋精神と西洋精神との比較或は批判について同感を寄せられず、全体を通じて空々しく感じたのであった

が、横光くらいの所で行留り、敗戦の刺戟とともに、文学は一変化を来すべき運命に見舞われたのではあるまいか。

「暗夜行路」も将来の道を示している文学ではない。敢て云えば、過去文学の頂点に立っていると云っていい。この主人公は、とに角苦しんで悩んで、自己の境遇を新にしようとしていた。「一方遂に人類が地球と共に滅びてしまうものならば、喜んでそれも甘受出来る気持になつていた。彼は仏教の事は何も知らなかったが、涅槃とか寂滅為楽という境地には、不思議な魅力が感ぜられた」

と、口先だけでも云えるような境地に達した。そして、彼の相手の女性の方でも、「夫のいのちが助かるにしろ、助からぬにしろ、兎に角、自分は此人を離れず、何処までも此人に随いて行くのだ」というような事を切りしきに思いつづけたのであった。ここで余韻を残して、この一巻の小説が終りを告げるのであるが、この主人公の病気が直ったにしろ直らなかつたにしろ、これ等男女は、そういう心理状態を具えたまま過去の人たるに安んじなければならぬのではないか。

それで、私は、未曾有の敗戦で心の打ちのめされてい



る日本では、文学の方面でも、陰惨險悪な作品が続出するのであるまいかと予期していたが、あながちそうでもなかった。しかし、文壇の気風態度、作品の色彩、描写振りでも戦前とは著るしくちがったものとなったようであり、またなりかかっているようでもある。どうしても旧態依然たる事はあるべきでないのだが、国家の独立後、他の方面で復古調が見られ、昔に捉われているように、文学でも新面目を呈する境地に到らないでまごまごしているのか。

戦争関係の小説は、報告的のものも、批判的のものも、

終戦直後から今日までに、可成り多く出ている。それ等の作品の多くは、読者に戦争の真相を知らせるものであるが、こういう小説類も次第に娯楽本位となり切ったようである。元来小説は、楽しみに読まれるものであったが、敗戦後の日本文壇では、純然たる娯楽本位から、小説が創作され、また鑑賞されるようになったのか。徳川末期の芝居でも小説でも、江戸通人の娯楽と歩調を合せた芸術であつたが、今日は、文明的社會批判や文明的人世觀、世界的戀愛觀などを取入れて、表面江戸通人の好みとは著るしくちがつているらしくても、それは表面だ

けで、本質は同じなのではないか。

すっかり娯楽本位である。全体の風潮がそうになってい  
るので、これからの小説は存在を続けるには、一閃に娯  
楽本位で行かなければならないのであろうか。社会批判  
を志すつもり作品だって、その批判を娯楽用にしてい  
るのである。戦争に勝とうと負けようと、文学芸術は娯  
楽本位でなければならぬようである。政治でも外交で  
も軍事でも、或は哲学でも、それ等を娯楽用の材料とし  
て取入れて、小説化するところに小説の本領はあるとし  
てもいいのであるか。

今回顧すると、島崎藤村の「家」なんかは、どう見ても娯楽用の小説ではない。作者自身もそれで読者を娯しませようとは毛頭考えていなかったにちがいない。こういう者を書くことによって、作者は悩みから解脱するとも云われそうで、そこに文学の人生的意義があるのであるろうか。これからだって、こういう態度で小説の筆を採るものが全く無くなることはあるまい。書いて書いて書き尽すことによつて悩みから脱却されるのなら、小説製作行為もおろそかにされない訳である。しかし、それは異例の事と云うべく、今後の小説の本道は、娯楽用に供

すること、小説作家の志すところは詰りはそこにあるのじゃないかと思われる。

私は年少の頃から、芝居をよく観て来た。ことに歌舞伎を観ることが好きであった。観劇を楽しみにしていても、芝居の内容は左程面白く思っていたのではなかった。由良之助や政岡の忠義に感心するものでもなければ、狂言作者の定めた善人悪人に好悪の感じを寄せていたのでなかった。無論男子の切腹を讚美する気にはなれず、女子の身売りに感動する気にはなれなかった。しかし、変化ある舞台光景が面白かったのだ。さまざま人物の

行動を、自分の空想で芸術化して楽しんでいたのか、西洋人のうちでも物好きな人間が、日本の歌舞伎に興味を持つのは、劇としての内容を抜きにした舞台光景に対してだけではあるまいか。私が年少の頃から歌舞伎を楽しんだのは、西洋人が歌舞伎を楽しむのと、翫賞態度が多少似ているようにも思われる。

昔ペルリが黒船で日本を訪ずれ、開国を強要した時、彼のペルリは、日本の国民性検討の一方法として、部下の何人かを江戸へ潜行させて劇場を観察させた。部下の観たのは、市村座の芝居で、その時は市川小團次が座頭

として、怪談「小幡の小平次」を演じていた。その演劇について聞かされたペルリは、そんな芝居を面白がって観ている日本人は頭脳が低級で、知能乏しと断定したそうである。名人小團次と云われて、江戸人の人気を背負っていた俳優の所演でも、傍観者には見くびられたのであった。

ところで、私なども、江戸時代の芝居を観たり小説を読んだりすると、よほど傑れた役者や傑れた作者のを見ているにしても、その内容には少しも同感せず、むしろ馬鹿にする気になるのであるが、頽廢期の文学芸術も、

それはそれなりに、何かしら面白味が感ぜられるのである。ペルリなどには幕末の江戸の芝居が侮蔑されたにしても、今日或種のアメリカ人には、歌舞伎が珍重され、優秀な芸術として取扱われたりするのである。明治以後の文学、今度の大戦争までの文学も、今日以後、近い将来に於ては、我々が江戸の芝居や文学を鑑賞するのと同じ態度で鑑賞されるようになるのではあるまいか。二葉亭をはじめとして、自然主義の文学、ロマン派の文学、人道主義の文学など、文学の正道を歩んで来たように思われていたが、将来になって回顧すると、そうでないか



も知れない。正道視するも、時代々々でちがうだけではないか。

敗戦後七八年の経験により、戦争は文学に左程の影響は与えないと識者らしい人に思われるようにもなったが、私はそうでないと思う。天皇制についての自由な批判などは、日本開闢以来の珍現象だが、今度の戦争は、過去の戦争とちがって、人間の本質を新たに見直すような結果にもなっている。文学などは、時代々々の反映であり、その時代々々の風潮の追隨者であるから、人間の生き方が変れば、文学の生き方も変るのである。中央気

象班長和達清夫氏は、「自然の威力に人力は及びもつかないという観念を、広島の一弾は根底から揺り動かした」と云っているが、こういう異様な考えを我々に起させるのも戦争の所行であって、我々の宇宙観も世界観も人間観、おのずから変って来なければならぬのである。文学の態度も変って来なければならぬのである。それがあまり変って来ないで、旧態依然としているのなら、それは作家が鈍感で、今の宇宙今の人生或は今の自己をよく見えていないためである。人間の戦争慾は減退せず、地球も宇宙も人類も滅亡するまで行詰まることを、真に痛感す

るようになる、文学もおのずから変わってくる筈である。

江戸の文学芸がああいう風であり、二葉亭以来の文学がこういう風であったとすると、敗戦を出発点とした新時代の文学は著るしく異色を呈しなければならぬので、私はそのつもりで見ようとしている。日本の行衛を見るような気で文学の行衛を見ようとしている。

さき頃、「新平家物語」を抜読みし、「青い山脈」や「てんやわんや」を通読したのも、敗戦後の日本の文学の行衛を見たいと思う私の物好きからであった。その行衛を見たいのは、多少は私の文学的真心に基くのである。

私は昔から芸術至上主義者でなく、文化尊重者でもない。  
（民主主義者でもない）しかし、生来、文学芸術に興味  
を持っていないばかりでなく、それから精神の糧を得んと、  
意識的に考えている。それで、世に謂うところの「私小  
説」風のものもよく読んでいて、どれにも棄て難い思  
いをすることもある。

ところで、敗戦後は、昔にも勝って新聞小説家が幅を  
利かせだした。幾つかの大新聞の売高が目醒ましく増殖  
するにつれて、新聞小説作家の名声も高くなり、広く知  
られるようになった。出版業者が彼等を重要視するばか

りでなく、文壇に於ても彼等を尊重するようになり、彼等の巨大なる存在の前では、慎ましやかな私小説作家などは小さな見すばらしい存在のようになった。

巨大と云っても、時世に連れての巨大で、見掛けだけの巨大であり、中身は空っぽであるとも云えようが、徳川時代の傑作、明治大正期の傑作を今読んで見ても、我々はこれ等作者の描いた現実の世界、空想の世界に回顧的妙味があるだけで、最早我々の心にひしひしと染むことはなくなっているのである。たとえば、私などは、近松の唄う或世界、或男女の風姿行動に詩を感ずること、三

味線によって音楽的陶醉を覚ゆる程度であるが、古文学旧文学、もう沢山だと云った感じがする。それで、この頃の巨大なる作家の作品に、素直に目を留めていい事になるのだが、現代小説の行衛をこういう作品によって、追究するのは、あまりに世俗的であり、事大主義的でありそうである。

私は「真空地帯」を通読して、昔の小説にないものを感じた気持がしたが、「嗚呼朝鮮」や「シベリヤ物語」を読んでも、私は人類絶望感に打たれ、ここに文学の行衛を見るように思った。これ等の作家はそんなつもりで

書いたのではないだろうが、私はそういう風に読んだのだ。「嗚呼朝鮮」は、戦争勃発後の南鮮の惨状を叙述したものだ。これを読むと、人類生活の手頼りなさが痛切に感ぜられるのだ。人類生活の手頼りなさを書いた物語や小説の存在は、和漢東西に亘って無数であって、少しも珍らしくない訳だが、しかしそれ等には作者の詩があり夢があつた。默阿弥の芝居にでも夢幻境のまやかしさはあつた。ところが、「嗚呼朝鮮」なんかには、人間の気力も抜け切つて虫けら同様のみじめな生存に墮するばかりの生物の情景が、ぽそぽそと叙せられている。昔の

軍記や近代の戦争小説には随所に見られる毅然としたところは何処にもない。これでは、文学としては魂を失っているようなもので、悲惨の光景を叙しながら、悲惨美は少しも出ていない有様なのだが、何等かの名目の「美」なんかには色取られない人類世界の实景を、現実に見続けなければならぬ如く、文学に於ても見せられることになるのではないか。

「シベリヤ物語」も悲惨美のない悲惨な光景の物語であるに過ぎないのだが、作中の某少佐なんかは、滑稽化された悲惨な人間の姿としての見本見たいに、私には感ぜ



られた。それは嗤い事ではないので、この少佐でも、「嗚呼朝鮮」の主人公でも、我々の影見たいなものではないかと思ったりする。そのうらぶれた姿は、昔の小説物語のなかのうらぶれ姿とは、ちがった人間のみじめさが感ぜられるが、それは、我々が自分をそこに見るためであるか。

文学の行衛をこういうところにたずねるのは、腑甲斐ない事であり、愚かな事であるかも知れない。巨大な作家の彪大な作品にこそ、移り変る世相も人間も、鮮明に且つ面白可笑しく写されているかも知れない。——など

と、こんな事を考えるのは、私が文学の行衛に関心を持つていたためであるが、人類の指導者らしい文学者か、人類か国家かの滅亡を唄う文学者か、亡び行く国家か人類を底深く抉るように描き出す文学者か、前途にかがやく人類の歓喜を示す文学者か、そういう種類の天才の出現を期待するのは、空想裡の楽しみではあるが、これも偉大なる政治家の出現すると同様の、空想裡の楽しみであるに過ぎないか。敗戦のために却って文化が華やかになつたらしいのは、我々が狐狸にばかされてそう見ているので、いつかは正体が露出することになるのではないだらう

うか。

「暗夜行路」をあとに、新たな出発をした日本の文学はどういう経路を取るであろうか。新聞小説などのように、大衆の好みを念頭に置いた純然たる娯楽用として進むか、自分一箇の好みを發揮して進むか。——私一箇の妄想としては、敗戦後の日本の、兎に角危い綱渡りをして来たものの、この先どうにもならない所へ落ちて行く時代の空気を身に侵染させた上で、それを娯楽化した小説が現われはしないかと云うことである。頭の働きのあま

りよくない読者に、毎日を面白く読ませ、その娯楽慾を満たさせながらも、宿命の如きものの真相を描き込んだものも出現しないかと云うことである。私の妄想は、文学に依って他人に伝えるように云い現わせないのであるが、過去の物語や小説にも、上べは誰にでも面白がられるように、筋を運んでいこううちに、底に沈痛な宿命の動きがかくされているものが幾つもあるもので、今後、珍らしそうにそういうものを期待するには及ばないとも云われそうだ。昔も今も突詰めると、作家の態度は同じことじゃないかと云われそうだ。

ところが、私は今後の文学の変遷振りは、在来のと根底からちがうべきだと思っている。天皇制とか封建制とかがすたれて民主制度になるとか、軍備を撤廃するとかしないとか云うような、時世の風潮が文学に浸潤するころなどを、私は気にしているのではなくって、人間の見方がすっかりちがって来るんじゃないかと、私は妄想しているのである。チャプリンのあの映画にも、戦争によって感化影響され、彼の映画的人生態度に変化を来たし、たらしく思われる所もあるが、日本の芸能人が敗戦によって感化影響されたことは、チャプリンの比ではない筈

である。

鋭敏な文学芸術人なら、人間の見方も描写の筆も在来のものと、すっかりちがうんじゃないかと、私は妄想している。用語用字の上でも、仮名使いが昔とちがったくらいの変化ではすまないようにも思われる。二葉亭や漱石藤村、或は花袋泡鳴なんかに会って、人生芸術の話をしても、お互いに相手の話が理解出来ないくらいになっているんじゃないかと思ったりする。人間の行衛に失望して捨鉢になったとしても、その捨鉢が、明治の小説に出ているような捨鉢とはちがうのであろう。（地球の捨

鉢を宿命として見た人のように）人世に対して希望を持つにしても、それは明治時代の「希望」とはちがうであろう。

今までの哲学や文学の標準から云うと、哲学でも文学でもないものが、出て来そうである。人騒がせにそんな者が出て来なくっても、よくっても、出て来そうである。新聞小説の形を取って出て来るかも知れない。私小説の形を取って出て来るかも知れない。或はラジオに依って出て来るかも知れない。

科学の進歩は恐るべきものであっても、哲学文学芸術

のたぐいは、昔から時代の進むにつれて進歩しているのではないと云われているが、進歩か退歩かは別として、変化はしているのであるし、今後は著るしく変化するのではないかと推察される。それに昔のものは次第に味わえなくなるのではないかと推察される。「源氏」でも「西鶴」でも、現代語に翻訳されているのは、その必要に迫られたためで、原書は六ヶしくて一般の小説愛好者には読めなくなっているであろうが、私は外国の古典は勿論、日本の古典でも読んで六ヶしいばかりでなく、物それ自身の真価が著るしく失われるのではないかと思つて



いる。私などはまだふるい教育を受けていたから、ふるい書物に未練らしく親しみを持っていないこともないが、敗戦などによつて心を搔き廻された新時代の人間、思想も趣味も型通りに人心に侵染し得なくなつた今日の人間には、古典の多くが、原書で読んでも、現代語新訳で読んでも、身に着かなくなるのではあるまいか。

私は明治十年代生れであるため、馬琴一派の作品は云うまでもなく、近松などの浄瑠璃本も熱読した。しかるに、前にも云つた如く、近松は絶対的讚美は寄せられなくなつた。内容の封建的陋臭は別としても。「道行」な

どで、人間の死に振りを美文的にいじり廻しているところが、美文どころではなくって、醜悪な文章のように感ぜられる。

数十年前、自然主義文学勃興の頃、この流派に属する作家達が会合の席で、シェークスピアやゲーテなんか、凡庸な作家である陳腐な詩人である、と云う者もあり、同意者も少くなかった。近松や西鶴もそうであつた。しかし、あの頃は時世がまだ泰平であつたので、旧物蔑視もそれほど烈しくなかつた。「早稲田でハムレットなんか演るのはふるい。演劇革新にシェークスピアとは？」

と新しがりながら、自由劇場がイプセンのボークマンをやる事をほこりとした。

大戦後の今日、世界があれほど苛酷な経験をし、殊に日本では敗戦の苦汁をあきるほど砥め、国情の不安は数珠つなぎに果しなく続いている今日、シェークスピアも近松も、イプセンも黙阿弥も、何の魅力を持っていかと私には思われそうであるが、実際として、文壇劇団に、過去の幽霊がこれからまた、盛んにぶらつくのであるか。

文学の行衛はどうなるか。島崎藤村などは、自分の悩

みをねちねち書きつづけて、それによってそれ等の悩みから脱却しようとしたのであり、吉川英治の「宮本武蔵」をはじめ、さまざまな所謂大衆小説は、人間の争鬪心を煽り、暗夜の狐火の如く日本人を何処かへ導いているようであるが、私は文学には人類救済の力なきことを痛感し、戦争に伴う人類の行衛などを考慮して、文学の筆を敝履の如く投棄てる者の続出することを空想したりしている。

ゴーゴリは「死せる魂」の後篇の原稿を焼いたのだそうだ。これは狂気のためか、自己の作品に不満足であつ

たためか。こういう事は、ロシアの文壇でなくつても、どこの文学社会美術社会にでもありそうな事であるが、文学そのものは存在の意味のないものと見極めるようになり、敢然として筆を棄てるものも現われないだろうか、私は空想するのである。

しかし、空想は空想だけの事で、我人ともに、大して存在の意味のあつての文学ではないことを悟り、ただの娯楽用のものとして趣向を凝らすことで満足するようになるのであるか。私はそうなる事を特に喜びもしないが悲しみもしない。



日本文学電子図書館

---

文学の行衛

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第7巻、新潮社

昭和42年5月30日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館